



御代出づの仕組み

みよごしのこくみ

龍神屋瑞光代表
宮崎 克子著





はじめに

一八九二年（明治二五）、大本教の開祖、出口ナオの口を通して、『良の金神』がこの世に現れるとお告げがあった。この前触れとして、日本のあちこちで神懸る人物が現れ、黒住教、天理教、金光教、などの新興宗教が誕生していた。肉体を持たない神は、人間の口を使って、いよいよ地球の浄化が始まる事を知らせ始めたのだ。神は教祖たちを通して、神の意志を伝え、宇宙の真理を教え、人間の正しいあり方を説き、靈的磁場を形成して行った。そうした中、この神の意志を理解し、大本教を舞台として靈界浄化の『雛形経綸』を推し進めたのが、出口王仁三郎である。

王仁三郎は、「救世主とは『瑞の御霊』である神素盞鳴尊である」と断言している。そして、神素盞鳴尊の御霊を持った自分が、さまざまな聖地に足

を運び、その神々とともに雛形を作り上げていった。中でも、長野県松代にある六〇〇メートル程の小高い山『皆神山』は、王仁三郎をして『尊い神山であり、世界の中心地』であると言わしめている。皆神山は、人工的に作られた世界最古のピラミッドとして一時期マスコミを賑わした。頂上には皆神神社があり、ピラミッドの由来が看板に記されているが、初歩的な重力制御方で作られ、電磁波が発生しているという。一見、何の変哲もない小高い山だが王仁三郎は、皆神山から発する強力な霊的磁場に感応していたことがしていたことが伺える。

王仁三郎の御神業は、周囲の人間には理解できない奥深さがあつたが、最後に『わしの役はこれで終わりじゃ』と言つて、昭和二三年にこの世を去つている。この言葉はさまざまな意味を含んでいるのだろうが、神仕組みが完成していない事を告げているようにも読み取れる。

この四年前、昭和一九年には、故岡本天明の自動書記が始まり、神々は『日月神示』を次の神仕組みのシナリオとして世に送り出した。この神示に



は、王仁三郎が出来なかった事（あるいは敢えてしなかった事）が示されている。

今回、王仁三郎の後を継ぐ形で、半ば強制的に神仕組みに参加させられた因縁の御霊（いんねんのみたま）を持った人間 仮にMとしよう が、それを読み解き、実行に移してきた。

『良の金神』から出口ナオにお告げがあつてから、一〇〇年以上過ぎた今、仕組みがずれたのか、あるいは予定通りであつたのか、それは分からない。だが、一九九九年を前に、『良の金神』を代表とする地の神々の力を得て、ようやくその答えを書き記す時が来た。

神に対する解釈は様々だが、すべてをエネルギーとして理解し、柔軟な心で読み進んでいただければ幸いである。

一九九七年一〇月吉日

注…追記として、「一九九九年を迎えて」「二〇〇八年子年にあたり」が付記されています。



甲斐三神山

山梨県と長野県の県境に、秩父多摩国立公園の一角をなす、奇峰群が屹立している。甲府の昇仙峡を表玄関と見ると、その北奥に蔵存する巨大奇岩の山は、姿を見た者を圧倒し、魅了する。

その山の名は、瑞牆山^{みずがきやま}。標高二二三〇メートル。富士山の北側に位置し、関東山地の主峰をなす金峰山に隣接する巨大磐座群である。

金峰山は、標高二五九〇メートル。出羽の月山、大和の大峰山と並ぶ三大修験道の山として、重層的な信仰を集めていた。山頂には、花崗岩の巨大な磐座、五丈岩が鎮座しており、これが甲州一円に見られる金桜神社の本宮、蔵王権現である。神道の教義では、神社とは、特に神の気の籠るところとして、山頂、山腹に建立された巨石群の麓に立てられた拝殿であるとされているが、瑞牆山はその巨石磐座群の集合体にも関わらず、現代にいたるまで、里宮を持っていない。



金峰山、瑞牆山、小川山（標高二四一八メートル）の三山は、神社本庁の教学顧問、故中西旭教授（中央大学名誉教授及び神社本庁教学顧問・享年一〇一歳）をもつてして、『我が国最大の磐座群』と言わしめた程の場所だ。その一つである瑞牆山が、現代にいたるまで、一度も御神体として奉られていないのは、なぜか。

瑞牆山には、世に出ぬ神々が押し込められており、その山から発せられる高波動を今まで誰もキャッチできなかった、と考えるのはどうだろう。

役の小角のころから、金峰山は霊峰として開かれていたのに、隣接する瑞牆山はほとんど無視されてきた。つまり、役の小角でさえ気がつかないほど、押し込められた神々は深く深く、限界から切り離されていたに違いない。王仁三郎は長野の『皆神山 ミナカミヤマ』を霊的世界の中心と感応していたが、その音は瑞牆山 ミズガキヤマとよく似ている。王仁三郎ほどの人物なら瑞牆山の存在を発見してもよさそうなものであるが、存在すらも知らなかったようだ。そう考えると、『今、この時まで、瑞牆山は世に出ぬ仕組みになっ

ていた』、つまり、『神仕組みの最後の舞台』という仮説が導きだされる。

ここで、故岡本天明氏の『日月神示』をひもといてみよう。このご神示は様々な知識人が解読を試みており、天明氏の死後、同じ系統の神からご神示を受ける人々があちこちに現れているのを見ると、『日月神示』は、世の立替えを知らせる預言書として確固たる地位を確立していることがわかる。

その神示のなかに甲斐の山について書かれている箇所が何カ所もあるのだ。

一部を抜粋してみると

『カイ奥山開き、結構結構』

『カイの御用はキの御用であるぞ。臣民はミの御用つとめて呉れよ』

『カイの言霊キざぞ。キが元と知らしてあろうが、カイの御用にかかりて呉れよ』

『カイの山々に立ちて、ひれふり被いてくれよ、ひつくの神に事へている臣民、代わる代わるこの御役つとめてくれよ。今はわかるまいが、結構な御役ぞ。』などである。



また、『甲斐』とは限定していないが、

『神の石はお山にあるから、お山開いてくれよ』

『四八か岳は昔から神が隠してをりた山ざから、人の登らぬようにして、龍神となりて護りて呉れた神々にもお礼申すぞ』

など、山を開くことが重要であることが随所に示唆されている。

この続きを読みたい方はお問合せ下さい